

実習をやり遂げる中でストレスを感じる 場面に対する効果的な周囲のサポート目的

江野 櫻¹⁾ 羽持 絢子¹⁾ 荒添 美紀²⁾

- 1) 保健学部看護学科看護養護教育学専攻4年
- 2) 保健学部看護学科看護養護教育学専攻

目的

本研究は、看護師免許と養護教諭免許のダブルライセンス取得を目指す看護学生が、看護学実習および養護実習中にどのような場面でストレスを感じたのか、ストレスを感じた際にどのようなサポートが実習をやり遂げるために効果的だったのかを明らかにすることを目的とする。

方法

研究デザインは、半構成的面接法による質的内容分析研究である。研究期間は2025年8月4日～9月1日。調査対象者はA大学の4年生で、看護学実習および養護実習を終了した5名である。主な調査内容は、実習中に学生がストレスと感じた場面、効果的だったと感じたサポート、サポートがもたらした変化等である。得られたデータは、逐語録を作成後、コード、サブカテゴリー、カテゴリー化した。本研究は、杏林大学保健学部倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：2025-27）。

結果

実習中のストレスと感じた場面は、60コード、23サブカテゴリー、【記録による負担】【初めての实習や慣れない環境に伴う負担】【指導者・教員との関係による困難】【患者との関係や援助に伴う負担】などの7カテゴリー、効果的だったと感じたサポートは、51コード、22サブカテゴリー、【愚痴や話を聞いてもらう】【褒められたり、頑張りを認めてもらう】【声掛けや励まし】【指導や助言をもらった】【一緒に支え合った】などの8カテゴリーが抽出された。

サポートがもたらした変化は、33コード、15サブカテゴリー、【モチベーションの向上】【心理的負担の軽減】【対処方法が分かってきた】【自己評価までは上がらなかった】

などの7カテゴリー。望ましかったサポートは、17コード、8サブカテゴリー、【事前に患者情報や情報共有の時間が欲しい】【指導・支援に関する希望】などの2カテゴリーが抽出された。

考察

ダブルライセンス取得を目指す看護学生のストレスには、通常の実習に加えて異なる環境への適応が求められるため、特有のストレスを抱えやすいことが示された。効果的なサポートとして、今井（2021）は、「看護学生に生じがちなストレスの対処行動として、友人や両親、先生に話す、相談、聞いてもらう、表現するという行動がある」と述べていたが、今回の結果も同様に、友人や家族、教員による傾聴や相談対応、励ましや承認の声かけ、気にかける関わりが挙げられた。また臨床指導者や教員からの具体的な助言や指導も効果的なサポートとなり、モチベーションの向上や自己効力感の向上、心理的負担の軽減につながっていることが伺えた。

一方で、教員との相性などによりサポートが十分に機能しない場合もあることも伺えた。そのため、複数の相談先を確保する体制も必要と考えられた。

以上より、学生一人ひとりに応じた支援と、安心して相談できる環境づくりが、実習をやり遂げるために重要であることが示唆された。

本研究は、専攻特性やサンプル数の点から結果の一般化には限界があるため、今後は、調査対象者も広げ、得られた知見の妥当性を検証していきたいと考えている。

謝辞

この度は、第15回学生リサーチ賞を賜り、大変光栄に存じます。このような評価をいただき、心より嬉しく思っております。本研究の遂行にあたり、終始温かいご指導と

ご支援を賜りました荒添先生に、心より深く感謝申し上げます。また、ご多忙の中インタビューにご協力いただいた皆様、ならびに基礎看護学研究室の諸先生方に深く御礼申し上げます。

【指導教員】保健学部看護学科看護養護教育学専攻 教授
荒添美紀

引用文献

今井ミツル (2021). 看護学生に生じがちなストレス. ストレス科学 35, 281-289.